

# 日本におけるベートーヴェン受容

明治・大正期の音楽雑誌の記事から

福本康之

## 0. はじめに

「楽聖ベートーヴェン」これは、日本でのベートーヴェン（Ludwig van Beethoven 1770-1827）受容において確立された一つのベートーヴェン像である。そしてそれは、他のいくつかのベートーヴェン像とは異なり、いわゆる「クラシック音楽の分野で『楽聖』といえばベートーヴェン」というような、クラシック音楽を代表するほどのものであり、ベートーヴェン像のなかでも、飛び抜けて日本の音楽界に浸透しているものである。と同時に、そのように「聖人」として神格化されたベートーヴェン像<sup>(注1)</sup>は、音楽界という枠組みを越え、日本の社会全体にわたって浸透してきた。

このようなベートーヴェン像の浸透について、筆者は、拙論「日本におけるベートーヴェン受容 昭和2年のベートーヴェン没後100年祭」<sup>(注2)</sup>において、昭和2年におこった「ベートーヴェン没後100年」というメモリアル・イヤーのムーブメントが大きく作用したことを指摘した。そして、そのムーブメントは、当時までのベートーヴェン受容の一つの結果として起きたものであり、大正時代の日本社会に見られた教養主義の広がりがある背景にあったのではないかと仮説を、筆者は立てた。

本研究は、この仮説を立証するための予備研究として、日本のベートーヴェン受容を洋楽導入期から昭和2年まで、つまり明治・大正期における、ベートーヴェン受容の調査と、そこからの考察をテーマとしている。そこで手がかりとして、筆者は、当時の音楽雑誌<sup>(注3)</sup>を用いて、当時のベートーヴェン受容を読み解こうと考える。では、なぜ音楽雑誌なのか？

## 1. 音楽雑誌というメディア

ベートーヴェン自身は18世紀末から19世紀にかけてドイツ・オーストリアで活躍した作曲家である。明治・大正期の日本において、ベートーヴェンを直接知るものはいなかった、といえよう。すなわち、日本におけるベートーヴェン受容は、海外の活字メディアによって伝えられた文字情報か、残された作品（メディアとしては楽譜）とその演奏によって行われたと考えられる。

明治・大正期のベートーヴェン受容のうち、作品（つまり音楽そのもの）の紹介に関しては、演奏会がその中心的な役割を果たしていた<sup>(注4)</sup>と考えられる。また、こうした演奏会においては、前後して講演<sup>(注5)</sup>が行われることがあり、ときにベートーヴェン自身やその作品について語られているため、それらもベートーヴェン像の形成に一役買っていたと考えられる。

しかし、「楽聖」としてのベートーヴェン像は、演奏会を通じて、その音楽作品の演奏や講演だけから形成されたのであろうか。前掲拙論において述べたように、マス・メディア<sup>(注6)</sup>を通して日本中に伝えられた「言説化されたベートーヴェン」の作用も大きいと、筆者は考える。その理由は、記録に残らない点（当時の録音メディアの状況からして）や、その場に立ち会える人数の少なさの点からして、場の性格を考慮すれば、演奏会で作品が演奏され、人物や作品が語られること自体よりも、むしろそうしたイベントと、そこで取り上げられる作品など、イベントに関連する

事柄が、マス・メディアにおいて紹介されていくことこそが、日本社会（当初は「日本楽壇」という社会）でのベートーヴェン像形成に影響してきたと考えられる。ベートーヴェン受容研究において、筆者は、この音楽雑誌というメディアの持つ社会的影響力<sup>(注7)</sup>を鑑み、そこに現われるベートーヴェン関連の記事を調査することにした。

## 2. 『音楽雑誌』にみるベートーヴェン像

日本で最初に発行された音楽の専門雑誌は、『音楽雑誌』である。この雑誌は、明治23（1890）年に創刊され、明治31（1898）年2月の第8巻第2号で終刊となる。その全74号中に、ベートーヴェンをテーマとした記事そのものは、ない。しかしそのことが、ベートーヴェンに関する受容状況について、この雑誌から読み取れるものはないということに、結びつきはしないだろう。『音楽雑誌』の記事の中に、ベートーヴェン自体をテーマとするものは無くとも、他の記事の中に、ベートーヴェンの名称が現れるケースがいくつか見られる。それらの記事において、ベートーヴェンの名が現れるコンテキストについて検討を加えれば、またそれら現れた名称がどのように形容されているかを見れば、そこから当時のベートーヴェン像について、何かが読み取れると筆者は考えた。そこで『音楽雑誌』においては、ベートーヴェンの名が現れる全ての記事について、筆者は調査し検討を加えた。

『音楽雑誌』において、ベートーヴェンの名は以下の9つの記事（演奏会記録の作曲者名としての登場を除く）において見ることができる。これらの記事の詳細については、別掲資料「資料 明治・大正期（昭和2年まで）の音楽雑誌に見るベートーヴェン関連記事」を参照のこと。

- (1) 「音楽家セバスチヤンバハ氏の傳（小傳）」 第3号 P.12-14
- (2) 「調和學其三」 古矢弘政 第7号 P.1-2
- (3) 「内神田松廼家琴子女史に一筆啓上」 在日本サント、セシル女 第10号 P.15-8
- (4) 「雜纂」 第39号 P.16
- (5) 「近代泰西音楽三大家小傳（宮）メンデルソン氏」 上眞行 第60号 P.26-30
- (6) 「音楽の起源及進化（承前）」 谷本富 第65号 P.1-5
- (7) 「思ひつきたるまに（三）進行曲」 鐸木生 第72号 P.38
- (8) 「楽家逸話二則 其一、ベートーフェン氏の接吻」 温古生 第8巻第1号
- (9) 「泰西楽家姓名の讀方」 第8巻第1号

この9点のベートーヴェン関連の記述から何が読み取れるであろうか。

すでに述べたように、約7年にわたる『音楽雑誌』において、ベートーヴェン自身あるいはその作品に直接関連した記事は、ない。(8)の記事についても、タイトルにこそベートーヴェンの名が見られるが、コンテンツそのものはフランツ・リストについての記述である。

『音楽雑誌』一号あたりの情報量は、A5版・約30ページ弱で、雑誌メディアの発達した今日からすれば決して多いものではない。したがって、この9件という数が、ベートーヴェン関連の記事、あるいは、ベートーヴェンという名称の登場件数として、特別に少ないとは言えないであろう。しかし、(1)や(3)またはその他の記事のように、バッハやモーツァルト、メンデルスゾーンなど、いわゆる西洋音楽史において「大作曲家」とされる人物に関する記事が見られる中で、ベ

トーヴェンに関する同様の記事は見られない。こうした状況もまた、当時のベートーヴェン受容のあり方を何か意味していると考えられる。

『音楽雑誌』において、歴史的な「大作曲家」が採りあげられるときは、その人物伝というスタイルの記事となっている。と考えると、ベートーヴェンについてのそうした記述が無いという事実からは、ひとつに、ベートーヴェンが「大作曲家」として認識されていなかった、という可能性が考えられる。しかし、その可能性は、以下の2種類の記事から否定されるだろう。

まず、(3)について。この記事の中では、ベートーヴェンを「彼の有名なる音楽家」と形容している。さらに、(7)においては、ベートーヴェンをモーツァルトやウェーバーと並ぶ「大家」と形容し、また(8)でも、ベートーヴェンを「大家」と称している。特に(8)は、リストに対する権威付けのために利用できるほどの存在であったことを伝える記事となっている。このように、ベートーヴェンという名称が現れる上記記事において、その名称に「偉大な」という類の形容句が添えられていることから、当時既に、ベートーヴェン自身が「大作曲家」であるという情報の伝達の事実があり、また読者層のベートーヴェンに対してその様な認識が生まれていたであろう可能性が考えられる。また、(4)の雑纂では、「音楽大家」として十一人の名前が挙げられており、その中の一人としてベートーヴェンの名が登場する。この記事についても、やはり「ベートーヴェン＝大作曲家」という情報伝達の事実と認識の可能性が指摘されよう。

さらに(2)や(6)の記事より、当時の「ベートーヴェン＝大作曲家」という情報伝達と認識の可能性が、調和学(和声法)など、ベートーヴェンの作品を根拠とした、音楽家としての歴史的「評価」であったことが伺える。

以上のような『音楽雑誌』に現れるベートーヴェンの名称の現れ方から、明治20年代洋楽導入期のベートーヴェン像を、筆者は次のよう考える。

当時、ベートーヴェンという人物(あるいは作曲家)自体に対する音楽史上の評価、すなわち「大作曲家の一人」としてのベートーヴェン像は、それほどではないが形成されてはいた。しかし、必ずしもそれは、後の「楽聖」というイメージほど突出したものではない。ただ、そうしたイメージは、後の「楽聖」像形成に向かう前提として見る事ができるものであり、いわばこの『音楽雑誌』が発行されていた明治20年代洋楽導入期が、「楽聖」というベートーヴェン像の形成の前段階として捉えることができると、筆者は考える。また同時に「楽聖としてのベートーヴェン」が、歴史的に一過性のムーブメントではないことを示すものともいえよう。

では、次にこの『音楽雑誌』に続く明治30年代の音楽専門雑誌として、『音楽之友』と『音楽新報』について見ていく。

### 3. 『音楽之友』と『音楽新報』にみるベートーヴェン像

明治30年代の音楽専門雑誌としては、明治34年創刊の『音楽之友』と同じく37年創刊の『音楽新報』が存在する。これらの雑誌においては、若干ではあるがベートーヴェンをテーマとした記事が見られるようになる。単純にこの事実だけからでも、洋楽導入が進んだ明治30年代は、先の『音楽雑誌』発行当時の明治20年代よりも、ベートーヴェンに関する情報量が増加したことが指摘される。当時の編集者が啓蒙的な、あるいは音楽界をリードしていこうと志していた人物であるとするならば、それは、音楽ジャーナリズムに携わる人々の間で、日本の音楽界におけるベートーヴェン紹介の重要性が認識されていたことを示すものであろう。また、当時の編集者が、商業的な

売上を念頭においている人物であれば、それは読者層におけるベートーヴェン需要を彼らが認識していたことを示すものだろう。いずれにせよ、ベートーヴェンをテーマとする記事の出現は、明治30年代に、ベートーヴェンに対する関心の割合が高くなっていったことを示す資料であるといえる。

また、『音楽雑誌』と同じく、『音楽之友』や『音楽新報』にも、ベートーヴェン以外をテーマとするものの、ベートーヴェンの名を含む記事を見ることができる。そうした名称が出現するだけの記事も、『音楽雑誌』の場合と同様に重要ではある。が、ベートーヴェンに対する当時の編集側と読者側両方の関心あり方を見る手段としては、作曲家やその作品などベートーヴェン関連のテーマによる記事をより有効なものと考え、筆者はそれらについての検討を行う。

これら2種類の雑誌に掲載されたベートーヴェン関連のテーマによる記事は、下記の通りである。

#### 『音楽之友』

- (1) 第2巻第4号 P.23-4 巖本捷治「嫦娥之曲を論じてベートーフェン氏の人格に及び」
- (2) 第3巻第2号 P.32-3 禰釋居士「作曲家としてのベートーフェン氏」
- (3) 第4巻第1号 P.29-? 寺井天來「ベートーフェン氏『月光の曲』の由來」
- (4) 第6巻第2号 P.50-1 赤司嚙花「ベートーフェンの孤獨」
- (5) 第11巻第2号 P.5-7 「ベエトオヴエン(評論)」乙骨三郎
- (6) 第11巻第2号 P.7-8 「名曲月の光(楽史)」乙骨三郎
- (7) 第11巻第4号 P.不明 「ベエトオヴエン(評論)」乙骨三郎

#### 『音楽新報』

- (8) 第2巻第9号 P.11-2 安藤弘「エグモントの大序」

『音楽之友』には、全部で7件のベートーヴェン関連のテーマによる記事が、『音楽新報』では、1件の記事が確認された。もっとも、『音楽新報』に関しては、確認できたのが僅か4号に過ぎないため、実際にはもう少し件数が増える可能性が残されている。

これらの雑誌に掲載されたベートーヴェン関連の記事を概観してみると、(1)や(2)(4)(5)(7)など、明治30年代には、その多くが、人物像(ただし概説的)か作品に関するものとなっていることがわかる。すなわちこの当時、ベートーヴェンの「人物像」には、ある程度の関心が寄せられていたといえる。また、『音楽之友』に見られる口絵<sup>(注8)</sup>の多さも、こうした傾向を反映したものであるといえる。しかし、これらは内容的に、まだ「楽聖=ベートーヴェン」というイメージの形成へと、ダイレクトに発展するものではなく、数ある作曲家評伝(数の増加それ自体は情報量の増大=ページ数の増加など、という音楽雑誌メディアの発達に追うところが大きい)の一つにすぎないもので、まだ依然として「楽聖」イメージの形成前提の段階といえる。しかしここでは、むしろ「楽聖ベートーヴェン」像の形成までに見られる、もう一つのベートーヴェン像に着目したい。

別掲資料にあるように、『音楽之友』には数点の楽譜が掲載されている。その多くは歌曲などの小品であるが、その中でも注目し値するのが、全4回にわたるピアノ・ソナタ第14番作品27-2《月光》(以下《月光》と略す)の楽譜掲載である。さらに、上記記事リスト内に、同曲関連の記事が2点見られる。このように、明治30年代のこの時期、ベートーヴェンに関しては、その作品《月光》への関心の高まりが指摘される。西原稔は、ベートーヴェンと《月光》の関係について、明治期において「ベートーヴェン=ムーンライト・ソナタの作曲者」という認識があったと述べている<sup>(注9)</sup>。こうした「ベートーヴェン=ムーンライト・ソナタの作曲者」というイメージの形成には、ベートーヴェンに関する単行本

の無い当時の状況<sup>(注10)</sup>を考慮すれば、マス・メディアとして『音楽之友』の果たした役割は決して少なくは無いといえる。東京音楽学校での遠山甲子の《月光》演奏<sup>(注11)</sup>などが、演奏史という観点から「ベートーヴェン＝ムーンライト・ソナタの作曲者」のイメージ形成に一役買っているということは事実であろうが、演奏ばかりがそうした世間的なイメージの形成に結びついた要因ではないであろう。実際、明治30年代には、《熱情》もたびたび演奏されているが、この時代に《月光》ほど「ベートーヴェン＝《熱情》ソナタの作曲者」とはならなかった。しかし、この《熱情》もまた、のちに同曲を「憑り付かれたように」演奏する久野久の登場によって、西原の述べる「逸話」の一材料となり、マス・メディアの中で「久野＝《熱情》ソナタ＝楽聖ベートーヴェン」というイメージが形成されていく材料となったのである。

この明治30年代にできあがった「ムーンライト・ソナタの作曲者」というイメージは、その作品が単に演奏されたということだけではなく、『音楽之友』というマス・メディアにおいて紹介された「逸話」にも負うところがあったと考えられる。

#### 4. 明治40年代以降から昭和2年までの音楽雑誌にみる「楽聖」像の形成

明治30年代の数少ない音楽専門雑誌であった『音楽之友』と『音楽新報』は、明治40年代に入ると合併し、『音楽界』となって新創刊される。また、この時期は別掲資料にあるとおり、京都での『音楽世界』(十字屋田中商店楽器部)創刊や東京音楽学校交友会誌としての『音楽』の創刊も見られる。さらに、昭和16年まで続く<sup>(注12)</sup>ことになる『月刊楽譜』の創刊も創刊される。こうした音楽雑誌の新創刊は、大正期に入るとさらに勢いづき、さまざまな専門誌が登場する。

では、この時代の音楽雑誌からは、どのようなベートーヴェン像が読み取れるだろうか。まず新創刊になった『音楽界』に見られるベートーヴェン関連の記事は、別掲資料にあるとおり、量的には前誌『音楽之友』から変化がない。しかし、他に重要な変化を見て取ることができる。

まず、ベートーヴェンという名称に関して最も大きな変化が現われた。決して多くはないが、タイトルに現われるベートーヴェンの名称23点のうち、5点に「楽星」、1点に「聖」なる形容がなされている。前誌『音楽之友』や『音楽新報』では見られなかった現象である。この状況より、明治40年代は、3章で指摘した「『楽聖』イメージの形成前提の段階」が、一歩進んだ状況とみなすことができる。

さらに大正期に入ると、『月刊楽譜』や『音楽藝術』、『楽星』において、ベートーヴェンの特集する号が現われてくる。これは、まさにベートーヴェンへの関心の高まりを示すものである。それら特集号を含め、この大正期には、また大きな変化が見られる。

明治期までのベートーヴェン関連の記事といえば、「ムーンライト・ソナタ」以外の記事といえば、ベートーヴェン自身に関する記述が主で、いずれも概説的な域を出るものではなかった。しかし大正期に入ると、個々の作品の研究や詳細な伝記研究、欧米で発表された研究論文の紹介など、その記事はより専門的かつ広範囲に及ぶものとなっていった。これらは、ベートーヴェン作品の演奏だけでは伝えられない、多様な情報であり、「楽聖」像形成プロセスの多様性を示している。それらの記事個々については、ここで触れることはしないので、別掲資料を参照されたい。

このように明治・大正期のマスメディアにおいて、これまで紹介してきたようなベートーヴェンの取り上げられ方こそが、まさに「楽聖ベートーヴェン」というイメージの形成に、大きく作用したと考えられる。しかし、マス・メディアに取り上げられたベートーヴェンは、決してそのいずれ

もが、そのような方向へと作用したわけではない。

## 5. 消えていったベートーヴェン像

これまで述べてきたように、音楽雑誌というマス・メディアには、「楽聖」像形成に結びついたであろう記事が、多数掲載されたことを筆者は指摘した。しかし、そのような影響力を持たなかった（あるいは別のイメージ形成につながるような力を持った）記事がなかったわけではない。

ベートーヴェンのさまざまなエピソード（『月刊楽譜』第16巻第7号掲載の「ベートーヴェンの戀愛」（執筆者：楽狂生）や『音楽グラフ』第5号第3巻掲載の「ベートーヴェン逸話」など、詳しくは別掲資料参照のこと）を伝える記事も散見されるのである。こうしたエピソードも、確かにベートーヴェンの一側面を捉えたものであり、決して「間違い」ではない。しかし、それらは「楽聖ベートーヴェン」というイメージ形成の中に飲み込まれた、または非常に微々たる影響力しかもたないものであったと言わざるをえない。

## 6. おわりに

本研究では、当時の音楽雑誌から明治・大正期に、当初は緩やかに、そして次第に昭和2年に向けて次第に加速的に、「楽聖ベートーヴェン」というイメージ形成が、具体的にはベートーヴェンの様々な側面からなされていったことが明らかになった。

また本研究では、同時にそれ以外のイメージが決して無かったのではないことも、明らかになった。このことを踏まえ、日本の洋楽受容史において「楽聖」として記述されてきたベートーヴェン像から落ちた、様々なベートーヴェン像についての研究を今後の課題とし、日本におけるベートーヴェン受容の新たな側面について検討していきたい。

### 【注】

- (1) 渡辺裕 (1997) P.32 参照。
- (2) 福本 (2000) 参照。
- (3) 今回の研究では、その問題の特殊性から教育関連の雑誌は除いた。
- (4) 詳細については、西原 (2000.6) 第2章を参照のこと。
- (5) 詳細については、福本 (2000) P.84-92 を参照のこと。
- (6) ラジオ放送の開始は大正14年で、明治・大正期のマス・メディアは、実質的に新聞と単行本、雑誌などの紙メディアであった。
- (7) 専門的な紙メディアとしては、ベートーヴェン関連の単行本が現われるのは、大正期であり明治期の音楽専門メディアといえは雑誌であった。西原 (2000.6) P.47-8 参照。
- (8) 口絵は、各号で関心の高いものとして掲載されていると考えられるため、記事同様に本論で取り扱った。
- (9) 西原 (2000.4) P.108-9 参照。
- (10) 注7 参照。
- (11) 西原 (2000.4) P.387 参照。
- (12) 終刊は、戦時体制下の第一次雑誌統廃合による。

### 【主要参考文献】

- ・福本康之「日本におけるベートーヴェン受容 昭和2年のベートーヴェン没後100年祭」、『国立音楽大学音楽研究所年報』第13集 P.75-92 2000年3月
- ・西原稔『「楽聖」ベートーヴェンの誕生』 2000年6月 平凡社
- ・西原稔「わが国のベートーヴェン受容の歴史」、『ベートーヴェン全集』第10巻, P.103-112 2000年4月 講談社
- ・渡辺裕『聴衆の誕生』1997年 春秋社

## 資料 明治・大正期（昭和2年まで）の音楽雑誌に見るベートーヴェン関連記事

### 『音楽雑誌』（音楽雑誌社）

- ・ 第3号 P.12-14 「音楽家セバスチアンバハ氏の傳（小傳）」  
「・・・氏[バハ]の死後モザートヘイラン及びビードホーベン諸氏の盡力に依りて世間始めて音楽社會に大功あるを知るに至れり・・・(中略)・・・氏が「ピアノ」「オルガン」及び「オルチエストラ」を熱心に研究して怠らざりしにあらざればヘイテンモザート及びヒートホーウエンも皆音に巧妙なる事能はざりしなるべし」
- ・ 第7号 P.1-2 古矢弘政「調和學其三」  
「・・・果して正則の楽曲を著作し音楽の音楽たる其味ひを會得する時は吾四千万の同胞中豈モザートベトベン、オーベル、ヴェルチの如き大家を得るに難しからんや・・・(以下略)」
- ・ 第10号 P.15-8 日本サント、セシル女「内神田松廼家琴子女史に一筆啓上」  
「・・・調和學なる者は範圍廣くして之を研究するには最と永き星霜を要するとや彼の有名なる音楽家「ベトヴェン」氏八日るよふ調和の學問ハ音楽者生涯の友にして其深淵は決して窺う可からざるものなりと・・・(以下略)」
- ・ 第39号 P.16 雜纂  
「音楽大家として其の名天下に轟くも十一人あり。パレストリナ、ハンデル。ジョン、セバスチアン、バハ。ヘイデン。モザート。ビートーベン。カール MARIA、ボン、ウエパー。フラズ、シユベルト。メンデルゾーン。ロパート、シユーマン。リチャード。ワク子ル氏」
- ・ 第58号 P.28-9  
同聲會音樂會 第二部 八 洋琴獨奏 ビートーベン氏作 ムーンライトソナタ 遠山甲子子  
プログラムは、二部制で全 13 プログラムからなる
- ・ 第59号 P.35-6  
嘯災義損音樂會 第一部 二 ピヤノ獨奏 アンダンテー（ソナタ第十四番第二號中） 作曲ベートーフェン氏
- ・ 第60号 P.26-30 上眞行「近代泰西音楽三大家小傳（宮）メンデルソン氏」  
「・・・盖しメ氏の作に、其則をビートーベン、モザート及びジョン、セバスチアン、バハ氏の曲雅に取り、更に腕麗しの風趣に於て、一種の新機軸を出せるものにして・・・(以下略)」
- ・ 第63号 P.41-2  
同聲會秋季音楽大演奏會 第二部 九 ヴァイオリン及ピアノ合奏 幸田幸子 内田菊子 ソナタ第五番 ビートーヴェン氏作曲  
プログラムは、二部制で全 10 プログラムからなる
- ・ 第65号 P.1-5 谷本富「音楽の起源及進化（承前）」  
「・・・次に「カウンターポイント」「プーガ」の發明ありてより、漸く進み行きつ、遂に十八世紀の初めに及んでヘンデルあり、バハありて頓に面目を一新し、ヘーヅン、モザット、フォン、ウエーベル之に次ぎベートーヴェン出で、「メロチック、ハーモニー」集大成せらる・・・(以下略)」

- ・第 69 号 P.38-9

同聲會春季音樂大演奏會 第一部 五 ピアノ四人聯弾 横山鹿枝子 高木ちか子 橋本正作氏  
瀧廉太郎氏 エグモント中のオーヴァチュア ビートーヴェン氏作曲  
プログラムは、二部制で全 10 プログラムからなる

- ・第 72 号 P.38 鐸木生「思ひつきたるまに」(三) 進行曲

「・・・豈に獨り軍樂隊の専有物となさんや、今大家の作に係かる有名なる進行曲を擧ぐればモザート氏の Zauderflote (僧侶進行曲) ウエバー氏の Der Freischütz (農民進行曲) メンデルソン氏の賀婚進行曲、及びビートーヴェン氏の (葬禮進行曲) 等なりとす・・・(以下略)」

- ・第 8 卷 第 1 号 温古生「樂家逸話二則 其一、ベートーフェン氏の接吻」

「著名の音楽家リスツ氏は年僅に十二にして音楽大演奏會を催すとの廣告を致しました、時に某氏は豫て大家ベートーフェン氏を訪ひまして其の演奏會の光榮を添ふる為に將た斯の少年を奨励する為に駕を枉げられたいと懇に請ひましたから氏は快く是を承け引き當日臨席致しました、

やがて時刻になりますとリスツ氏は演壇に現はれました、そうして目敏くも大家ベートーフェン氏が客席の前列に居るゝのを認めました、大概の少年でござりますると、多少耻かむとか憶するとか云ふ様な工合で、思ふほどには行ぬが常でありますに、彼の少年は少しも勇氣を損じませぬ、少しも自身を滅じませぬ、却って非常の活氣を以て存分に演奏し了りました、

續て起る拍手の音、喝采の響、恰も百雷の一時の轟くかと思はれて、暫しは鳴り止みませぬ、其中で衆聽幾千百の視線の焼點たるリスツ氏目ざして一種の引力に吸収さるゝかの様に一人の紳士は演壇に進み出で近づくまゝに兩手を延べて少年を抱き擧げ、やがて其雙の頬に接吻しました、是ぞ大家ベートーフェン氏で御座ります、少年リスツ氏は大家の此の擧動を冷澹虚心に看過ごすことは出来ませぬ、なぜ、云ふ迄もなく少年の技倆を高妙のものとし、多望のものとして誠實なる保證をしたのであるから、そこで少年は更に幾層倍の感奮と熱心とを以て其演奏を反覆しました」

- ・第 8 卷 第 1 号 「泰西樂家姓名の讀方」

「左に記する泰西諸大家の名は人に由て其讀方を異にし疑惑少なからず何卒正しき讀方を示されん事を望む」

この中で揚げられている作曲家名は以下のとおり。Abt, Bach, Beethoven, Bellini, Beriot, Berlioz, Bertini, Boieldieu, Caccini, Chaerubini, Chopin, Czerny, Gounod, Handel, Haydn, Mendelssohn

(注記)

・『音楽雑誌』は、明治 23 (1890) 年 9 月音楽雑誌社より創刊。明治 31 (1898) 年 2 月に第 8 卷第 2 号をもって終わる。

・『音楽雑誌』については、復刻版 (出版科学総合研究所, 1984) を用いて、全号の調査を行った。

『音楽之友』 / 『音楽』 (楽友社)

- ・第 2 卷第 4 号 P.23-4 巖本捷治「嫦娥之曲を論じてベートーフェン氏の人格に及び」

- ・第 3 卷第 2 号 P.32-3 禰釋居士「作曲家としてのベートーフェン氏」

- ・第 4 卷第 1 号 P.29-? 寺井天來「ベートーフェン氏『月光の曲』の由來」  
ページ欠落のため、終了ページ不明。

- ・ 第4巻第4号 口絵 「ボーン山林作曲中のベートーフェン氏」
- ・ 第6巻第2号 P.50-1 赤司嚙花「ベートーフェンの孤獨」
- ・ 第8巻第1号 口絵 「ベエトオヴェン」
- ・ 第8巻第3号 P.2-3 「別れの曲 ビトオヴェン」(楽譜)
- ・ 第8巻第5号 P.4-5 「歌調(風琴曲) ベエトオヴェン」(楽譜)
- ・ 第8巻第6号 P.4 「シンホニイの一節(洋琴風琴曲) ベエトオヴェン」(楽譜)
- ・ 第10巻第5号 P.30-1 「ベートーヴェンに関する新著」石倉小三郎
- ・ 第11巻第2号 口絵 「ムウンライト、ソナアタの作曲」鈴木のぶ子寄贈
- ・ 第11巻第2号 口絵 「ベエトオヴェンの老年時代」島崎藤村氏寄贈
- ・ 第11巻第2号 口絵 「ベエトオヴェンの壮年時代」島崎藤村氏寄贈
- ・ 第11巻第2号 口絵 「ベエトオヴェンの青年時代」島崎藤村氏寄贈
- ・ 第11巻第2号 口絵 「ベエトオヴェンの眞筆」島崎藤村氏寄贈
- ・ 第11巻第2号 P.5-7 「ベエトオヴェン(評論)」乙骨三郎
- ・ 第11巻第2号 P.7-8 「名曲月の光(楽史)」乙骨三郎
- ・ 第11巻第3号 P.不明 「楽聖肖像の(六)」  
バッハ、ヘンデル、グルツク、ハイドン、モツアルト、ベエトヴェン、ロシニ、シユベルト、シユウマン、メンデルゾーン、リスト、グウノ、ワグネル  
該当ページ欠落のためページ数不明。記事の存在は目次より確認。
- ・ 第11巻第3号 P.不明 「オルガン曲 ベエトヴェン」(楽譜)  
楽譜のためページ数記載なし。
- ・ 第11巻第4号 P.不明 「ベエトオヴェン(評論)」乙骨三郎
- ・ 第12巻第3号 P.不明 「ムンライト、ソナタ(第一段) ベエトヴェン作」(楽譜)  
楽譜のためページ数記載なし。
- ・ 第12巻第4号 P.不明 「ムンライト、ソナタ(承前) ベエトヴェン作」(楽譜)  
楽譜のためページ数記載なし。
- ・ 第12巻第6号 P.不明 「ムンライト、ソナタ(承前) ベエトヴェン作」(楽譜)  
楽譜のためページ数記載なし。

- ・第13巻第1号 P.不明 「ムンライト、ソナタ（承前） ベートーヴェン作」(楽譜)  
楽譜のためページ数記載なし。

(注記)

『音楽之友』は、明治34(1901)年11月楽友社より創刊された月刊雑誌で、明治40(1907)年11月を刊行後『音楽新報』(音楽新報社)と合併し『音楽界』として新創刊される。

『音楽』は、『音楽之友』が第7巻第6号より改題となったもの。

『音楽之友』および『音楽』については、全73号のうち、第1巻第3-6号は、該当巻号の所在未確認のため、記事未調査。

『音楽新報』(音楽新報社)

- ・第1巻第6号 口絵 「ベートーヴェン誕生の家屋」
- ・第2巻第2号 口絵 「曲を案ぜるベートーヴェン」
- ・第2巻第9号 P.11-2 安藤弘「エグモントの大序」

(注記)

『音楽新報』は、明治37(1904)年2月音楽新報社より創刊された月刊雑誌で、明治40(1907)年11月を刊行後『音楽之友(当時は『音楽』に改題)』(楽友社)と合併し『音楽界』として新創刊される。

『音楽新報』については、全39号について記事調査を行った。

『音楽界』(楽界社)

- ・第1巻第5号 「美はしき自然(合唱曲) ベードホフエン曲 文学士乙骨三郎譯歌」(楽譜)  
楽譜のためページ数記載なし。
- ・第1巻第10号 P.5-10 文学士小林愛雄「ベートーヴェン新説(楽論)」
- ・第2巻第4号 口絵 「曲を案ぜるベートーヴェン」
- ・第2巻第11号 P.5-16 文学士田村寛貞「ベートーヴェンのシンフォニアエロイカに就て」
- ・第4巻第2号 P.14-7 「マルモツテ使ひの歌(伴奏附) 楽聖ベートーヴェン作曲」(楽譜)
- ・第5巻第12号 口絵 東京音楽院長天谷丹桂寄「ベートーヴェンの少時」
- ・第5巻第12号 P.14-7 女子音楽園主監千田時次郎「楽聖ベートーヴェン」
- ・第6巻第1号 P.12-6 女子音楽園主監千田時次郎「楽聖ベートーヴェン」
- ・第6巻第7号 口絵 高折周一寄「楽聖ベートーヴェンの奮跡 - ベートーヴェンの母堂ノベート

ーヴェンの生まれし家 / 同上部屋 / 常用の楽器」

- ・第 170 号 口絵 「ベートーヴェン銅像除幕式」
- ・第 170 号 P.8-30 三重縣師範學校教諭村上一郎「樂聖ベートーヴェン小傳 - 緒言 / 講演の題目にこの樂聖を選んだ理由 / 容貌と風采 / ボンの町 / 大先生の生活と其著作 / 大先生の著作に就きての所感 / 其生涯に於ける吾等の感想」
- ・第 170 号 P.49-51 青波「ベートーベン銅像除幕式」
- ・第 192 号 「秋の庵 樂曲ベートーヴェン 樂歌天野流星」(樂譜)  
樂譜のためページ数記載なし。
- ・第 194 号 「秋の庵 樂曲ベートーヴェン 樂匠プレスナー」(樂譜)  
樂譜のためページ数記載なし。
- ・第 207 号「ベートーエンの午後」  
目次のみの記載で記事はなし。
- ・第 221 号 P.3-4 小林愛雄「ベートーヴェン断想」
- ・第 230 号 P.2-3 大田黒元雄「ベートーヴェン」
- ・第 230 号 P.4-8 「ベートーフェン研究の興味ある諸問題」
- ・第 230 号 口絵 「ベートーフェン自筆の樂譜」
- ・第 230 号 P.9-12 「偶像破壊者及び民主々義としての聖ベートーフェン」
- ・第 230 号 P.13 「ベートーフェンの作品に對する感想」
- ・特倍号 [ 大正 12 年 5 月号 ] 口絵 「赤裸のベートーフェン」
- ・特倍号 [ 大正 12 年 5 月号 ] P.63-73 小泉洽「音樂百話赤裸の『ベートーフェン』」

(注記)

『音樂界』は、明治 41 (1908) 年 1 月、『音樂之友 ( 当時は『音樂』と改題 )』( 樂友社 ) と『音樂新報』( 音樂新報社 ) の合併により、樂界社から新創刊された月刊雑誌。大正 11 (1922) 年に『樂壇』を吸収。大正 12 (1923) 年 12 月刊行の第 265 号をもって終わる。

『音樂界』については、復刻版 ( 大空社 ) により全記事調査済み。

資料 5 『音樂世界』( 京都十字屋田中商店樂器部 )

- ・第 1 卷第 1 号 口絵 「ベートーヴェン」肖像

- ・ 第1巻第1号 P.2-4 廣田守信「ベートーヴェンの一生」
- ・ 第1巻第1号 P.11 「ムーンライトソナタに就て」
- ・ 第1巻第1号 「ムーンライトソナタ」  
楽譜のためページ数記載なし。
- ・ 第1巻第10号 口絵 「ベートーヴェンの夢」
- ・ 第2巻第1号 口絵 「ベートーヴェン」
- ・ 第2巻第11号 口絵 「ベートーヴェン」
- ・ 第2巻第11号 口絵 「ベートーヴェン」
- ・ 第3巻第3号 口絵 「ベートーヴェン」の博物館
- ・ 第3巻第7号 口絵 「ベートーヴェン、モツァルトの家にて演奏す」
- ・ 第3巻第11号 口絵 「ベートーヴェン」
- ・ 第4巻第4号 P.7-8 「楽聖ベートーヴェン」
- ・ 第5巻第5号 P.1-2 「ベートーヴェンの作曲」
- ・ 第5巻第6号 P.1-2 「ベートーヴェンの作曲」
- ・ 第5巻第8号 P.1-2 長洞生「ベートーヴェンの作曲」
- ・ 第5巻第9号 P.1-2 長洞生「ベートーヴェンの作曲」
- ・ 第6巻第5号 口絵 「ムーンライト ソナタ」
- ・ 第7巻第2号 口絵 「ベートーヴェン」

(注記)

『音楽世界』は、明治40(1907)年1月京都の十字屋田中商店楽器部より創刊された月刊雑誌で、第11巻第9号まで続く。

『音楽世界』全117号のうち、第7巻第4号、第8巻第4 - 5 , 9 - 12号、第9巻第3号第10巻第7号、第11巻第3 , 5号を除いたもの(所在未確認のため)について、全て調査を行った。

『音楽』(東京音楽学校校友会)

- ・ 第1巻第8号 P.15-9 田村寛貞「クリンガーのベートーヴェン」

- ・第2巻第4号 P.29-31 高安月郊「ゲーテとベートーヴェン」
- ・第5巻第4号 P.28-34 小田島次郎「ワグナーの見たるベートーヴェン(二)」
- ・第10巻第10号 P.1-22 柿沼太郎「ベートーヴェンのソナタ研究(四)」

(注記)

『音楽』は、明治43(1910)年1月東京音楽学校学友会より同会の機関紙として、共益商社楽器店より創刊され、大正11(1922)年12月の第13巻第12号まで続く。

『音楽世界』全117号のうち、第7巻第4号、第8巻第4-5, 9-12号、第9巻第3号第10巻第7号、第11巻第3, 5号を除いたもの(所在未確認のため)について、全て調査を行った。

『月刊楽譜』

- ・第6巻第5号 P.25 「楽聖ベートーヴェン作 『まごころの友よ』(単音唱歌)」(楽譜)
- ・第6巻第8号 P.31-3 渡邊浩「ムーンライトソナタ 戦争小話」
- ・第6巻第9号 P.6-7 文學士二見孝平「ヴィクトルユーゴーのベートーヴェン論」
- ・第6巻第9号 P.26-8 渡邊浩譯「ムーンライトソナタ」
- ・第6巻第12号 P.16-7 「楽聖ベートーヴェン作 天野流星子作歌 『秋の庵(獨唱歌曲)』」(楽譜)
- ・第7巻第2号 P.22-3 「楽聖ベートーヴェン 『オルガン曲(歌調)』」(楽譜)
- ・第7巻第4号 P.26 「楽聖ベートーヴェン 『アツレグレート(器楽曲)』」(楽譜)
- ・第8巻第9号 P.12 「ベートーヴェン作曲 高梁豊穂作歌 『秋の遊』」(楽譜)
- ・第8巻第9号 P.14-5 「ベートーヴェン作曲 武島羽衣作歌 『流水の曲』」
- ・第8巻第11号 P.7-8 大手敏道「天才作曲家とその生涯」  
シューベルトやメンデルスゾーン、チャイコフスキーなども取り上げられている。
- ・第9巻第11号 口絵 「百五十年祭ヲ行セラシム楽聖(ベートーベン氏)」
- ・第9巻第12号 口絵 「ベートーヴェンのマスク」
- ・第9巻第12号 「楽聖ベートーヴェン作 『Faithful Johnie(獨唱曲)』」(楽譜)  
楽譜のためページ数記載なし。
- ・第9巻第12号 「楽聖ベートーヴェン作曲 與謝野鐵幹作歌 『こほろぎ(獨唱曲)』」(楽譜)  
楽譜のためページ数記載なし。

- ・ 第9巻第12号 「楽聖ベートーヴェン作曲 旗野十一良作歌 『楽しき友(合唱曲)』」(楽譜)  
楽譜のためページ数記載なし。
- ・ 第9巻第12号 「楽聖ベートーヴェン作 『Today and Tomorrow』」(楽譜)  
楽譜のためページ数記載なし。
- ・ 第9巻第12号 「楽聖ベートーヴェン作 天野流星子作歌 『秋の庵(合唱曲)』」  
楽譜のためページ数記載なし。
- ・ 第9巻第12号 P.9-11 藤井夏人「瞑想の人、力の表現者ベートーヴェン」
- ・ 第10巻第12号 P.4-5 法月歌客「ベートーヴェンとラズモフスキー伯爵」
- ・ 第11巻第1号 P.8-9 法月歌客「ピアニストとしてのベートーヴェン」
- ・ 第14巻第7号 P.7-12 門馬直衛「ベートーヴェンの絃楽四重奏研究」
- ・ 第14巻第8号 P.8-14 門馬直衛「ベートーヴェンの絃楽四重奏研究」
- ・ 第14巻第8号 P.41-3 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」
- ・ 第14巻第9号 P.41-3 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」
- ・ 第14巻第10号 P.47-9 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」
- ・ 第14巻第11号 P.2-4 石川義一「作品より見たるベートーヴェンの眞価検討」
- ・ 第14巻第11号 P.37-8 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」
- ・ 第15巻第1号 P.4-9 門馬直衛「ベートーヴェンの交響曲」
- ・ 第15巻第1号 P.56-60 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」
- ・ 第15巻第2号 P.51-2 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」
- ・ 第15巻第3号 P.45-8 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」
- ・ 第15巻第5号 P.49-53 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」
- ・ 第15巻第6号 P.45-8 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」
- ・ 第15巻第7号 P.21-8 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」
- ・ 第15巻第8号 P.18-31 正司憲太郎「ベートーヴェン以後の交響楽作者」

- ・ 第 16 卷第 2 号 P.41 「ベートーフェン作曲 『葬送行進曲』(楽譜)
  
- ・ 第 16 卷第 3 号 (ベートーフェン記念号)
  - 表紙「ベートーフェンの彫顔」
  - 三色版「ベートーフェンの肖像」
  - 口絵「ベートーフェンの生まれた室」
  - 口絵「遺書を書いたハイリゲンスタット」
  - 口絵「ベエトーフンの墓」
  - 口絵「響の為に用ひた道具」
  - 口絵「ベートーフェンの漫画」
  - 口絵「一八一八年のベートーフェン」
  - 口絵「ベートーフェンの死面」
  - 写真「ベートーフェンの筆跡と第九交響曲の主題」
  - 写真「ベートーフェンの生家」
  - 写真「ヴイーンにあるベートーフェン記念碑」
  - 写真「ベートーフェンの使用したグラーフのピアノ」
  - 記者「口絵説明」P.1
  - 門馬直衛「英雄ベートーフェン」P.2-4
  - 一記者「ベートーフェンの言葉」P.5
  - 廣瀬將「ベートーフェン年譜」P.6-21
  - 一記者「ベートーフェンの研究用品」P.22
  - 廣瀬將「ベートーフェンの生涯」P.23-37
  - 一記者「ベートーフェンの作品研究者へ」P.38
  - 門馬直衛「ベートーフェン交響曲」P.39-49
  - 伊庭考「『ミサ ソレムニス』の解説」P.50-5
  - 桂近乎「ベートーフェン名曲解説 一、交響曲 二、ピアノ・コンチエルト 三、ヴァイオリン・コンチエルト 四、ピアノ・ソナータ」P.64-90
  - 首藤君敦「ベートーフェンの名曲と珍曲」P.91-100
    - 「ベートーフェン作曲『レントラー舞曲(ヴァイオリン名曲)』」 P.101-3 (楽譜)
    - 「ベートーフェン作曲『ソナティナ(マンドリン名曲)』」 P.104-6 (楽譜)
    - 「ベートーフェン作曲『親しきジヨニイ(獨唱名曲)』」 P.107 (楽譜)
  
- ・ 第 16 卷第 4 号 P.53-5 大沼魯夫「ベートーフェンの序曲解説」
  
- ・ 第 16 卷第 4 号 P.56 一記者「ベートーフェン祭」
  
- ・ 第 16 卷第 5 号 P.13-7 正司憲太郎「ベートーフェン以後の交響楽作者(完)」
  
- ・ 第 16 卷第 6 号 P.14-6 重信常雄「ベートーフェン以前の交響楽」
  
- ・ 第 16 卷第 6 号 P.18-20 X Y Z「ベートーフェンの『熱情の曲』の話」
  
- ・ 第 16 卷第 7 号 P.23-25 重信常雄「ベートーフェンの交響曲」
  
- ・ 第 16 卷第 7 号 P.26-9 楽狂生「ベートーフェンの戀愛」

- ・第16巻第9号 P.21-5 正司憲太郎「ベートーフェンの室内楽」

(注記)

『月刊楽譜』は、明治45(1912)年1月、松本楽器から新創刊された月刊雑誌。第一次雑誌統合により、昭和16(1941)年10月刊行の第30巻第10号をもって終わる。

『月刊楽譜』については、昭和2年刊行分までのうち、所在が確認された以下のものについて調査を行った。

第1巻第2 - 3, 7, 9号、第2巻第1, 4 - 5号、第3巻第3, 9, 11号、第5巻第1 - 2, 4, 6 - 7, 12号、第6巻第1 - 6, 7 - 12号、第7巻第1 - 6, 10, 12号、第8巻全号、第9巻全号、第10巻全号、第11巻全号、第12巻第1, 3 - 8, 10, 12号、第13巻全号、第14巻全号、第15巻全号、第16巻全号

その他の音楽雑誌

- ・『新音楽』第1巻第7号 P.8-11 ウィリアム・ロバート・チルフォード/法月歌客譯「ベートーヴェンの民本主義」
- ・『音楽倶楽部』第1巻第3号 P.34 「クロイツェルソナタ 作品四十七 ベートーヴェン作」
- ・『音楽倶楽部』第1巻第3号 P.40 「ソナタ 八長調 作品三十 ベートーヴェン作」
- ・『音楽倶楽部』第1巻第3号 P.55 「散歩の間に靈感を得たベートーヴェンの作曲」
- ・『音楽新潮』第1巻第1号 口絵 「ベートーヴェン」
- ・『音楽新潮』第1巻第1号 P.14-18 柿沼太郎「友人の見たベートーヴェン」
- ・『音楽新潮』第1巻第2号 P.35-38 柿沼太郎「友人の見たベートーヴェン(二)」
- ・『音楽新潮』第1巻第4号 口絵 「ベートーヴェンの散歩姿」
- ・『音楽新潮』第1巻第4号 P.39-41 柿沼太郎「友人の見たベートーヴェン(三)」
- ・『音楽新潮』第1巻第4号 P.21 「楽譜ミヌエット(ベートーヴェン)」
- ・『音楽新潮』第2巻第1号 口絵 「荒野に立てるベートーヴェン」
- ・『音楽新潮』第2巻第5号 P.21-4 佐藤昌「ベートーヴェンと蔵書」
- ・『音楽新潮』第2巻第6号 P.34-7 中西武夫「ベートーヴェン礼讃」
- ・『音楽新潮』第3巻第10号 P.2-7 久志卓真「ベートーフェンとセザンヌに就いて(上)」
- ・『音楽新潮』第3巻第11号 P.24-6 久志卓真「ベートーフェンとセザンヌ(下)」
- ・『音楽新潮』第3巻第4号 P.55-6 「ベートーヴェンのレコード」

- ・『音楽新潮』第4巻第6号 P.2-7 スイリル・スコット「千九百廿七年に於けるベートーヱンの効果」
- ・『音楽新潮』第4巻第6号 P.36 「コロムビアのベートーヱン・レコード」
- ・『音楽新潮』第4巻第6号(広告)  
「ベートーヱン百年祭に際しベートーヱン名曲レコード特価提供致します」  
十字屋楽器店(東京)の広告
- ・『音楽新潮』第4巻第11号 口絵 「ソヴェート・ロシアで百年祭を催されたベートーヱン」
- ・『音楽新潮』第4巻第11号 P.9-14 中根弘「サヴェートロシアに於けるベエトホヴェン百年祭」
- ・『音楽新潮』第4巻第12号 P.9-13 徳永政太郎「伊太利人の観たるベートーヴェン」
- ・『音楽グラフ』第3巻第1号 口絵 「ベートーヴェンの第九交響楽演奏(東京音楽学校)」
- ・『音楽グラフ』第3巻第1号 P.9-10 増澤健美「ベートーベンの人相と風態」
- ・『音楽グラフ』第4巻第3号 P.11-14 「楽聖ベートーベンの後年」
- ・『音楽グラフ』第4巻第4号 P.12-14 「楽聖ベートーベンの後年(前の続き)」
- ・『音楽グラフ』第4巻第6号 P.12 「作曲家としての首途」
- ・『音楽グラフ』第4巻第11号 P.22 「ベートーヴェンの」  
雑纂記事の一つで、百年祭の記念事業としてベルリンにおける記念像建立を伝えたもの
- ・『音楽グラフ』第5巻第3号 口絵 「今年三月百年祭を催されるルトウ井ッヒ フアン ベートーベン」
- ・『音楽グラフ』第5巻第3号 巻頭言 村上「ベートーヴェン百年祭に當りて」
- ・『音楽グラフ』第5巻第3号 P.4-9 村上一郎「パテチック・ソナタ」
- ・『音楽グラフ』第5巻第3号 P.11-14 石嶺楽人「古今獨歩の偉人ベートーベン」
- ・『音楽グラフ』第5巻第3号 P.20 「ベートーベン逸話 大楽匠たる資格」
- ・『音楽グラフ』第5巻第3号 P.26 「ベートーベン逸話 ペテンの頭髪」
- ・『音楽グラフ』第5巻第3号 P.27 「ベートーベン記念賞」
- ・『音楽グラフ』第5巻第4号 口絵 「ベートーヴェンの舊家と記念館」

写真2点

- ・『音楽グラフ』第5巻第5号 口絵 「ベートーヴェン百年記念放送写真」  
写真6点
- ・『音楽グラフ』第5巻第7号 口絵 「獨逸ボン市に於けるベートーヴェン百年祭」  
写真4点
- ・『音楽評論』第2巻第3号 P.17-8 Mの字生「ベートフエンの悪口」
- ・『音楽評論』第2巻第3号 P.21-4 ヨゼフ・レウ編「ベエトホベン第五交響樂のアンダンテ（オルガン曲）」
- ・『音楽評論』第2巻第4号 P.10-1 堀内敬三「ベートーヴェンの偶像化」
- ・『音楽藝術』第五号（ベエトオヴェン記念號）
  - 口絵「一八〇八年頃のベエトオヴェン シュノオル プオン カロルスフェルト筆」
  - 口絵「『不滅の恋人』に送りし手紙の最後の頁」
  - 口絵「一八一四年のベエトオヴェン ルイ レトロンヌ筆」
  - 口絵「一八一八年のベエトオヴェン クレエベア筆」
  - 口絵「ベエトオヴェン死去の部屋」
  - 口絵「臨終の床に於けるベエトオヴェン ヨハン ダンハウザア筆」
  - 口絵「ウイナにあるベエトオヴェン記念碑」
  - 口絵「第九交響樂のスケッチ」
  - 口絵「第九交響樂の献呈詞」
  - ロマン・ロラン／大田黒元雄譯「ベートーヴェンの生涯」P.2-45
  - 津川圭一「ベエトウエ`ンに於ける宗教」P.46-52
  - 須永克己「ベートーヴェンとソナタ形式」P.53-8
  - 堀内敬三「管絃樂法から見たベートーヴェン」P.59-61
  - 野村光一「ベートーヴェンの洋琴曲」P.62-9
  - 牛山充「日本で演奏されたベートーヴェンの作品概観」P.70-8
  - 弘田親輔「蓄音機で聴かれ得るベートーヴェンの作品」P.81-4
- ・『楽星』第1巻第2号 P.18 「ベートーフエン作曲 レオポルド・アウアー編曲 『コーラス オヴ`ダヴーイツシエス』(解説)」
- ・『楽星』第1巻第6号 P.5-6 堀内敬三「名曲解説 序樂『コリオラン』ベートーヴェン作曲」
- ・『楽星』第1巻第6号 P.6-7 堀内敬三「名曲解説 序樂『コリオラン』ベートーヴェン作曲」
- ・『楽星』第1巻第6号 P.10 「ベートーフエンの手紙」
- ・『楽星』第2巻第3号 P.1-3 三瀧末松譯「ベートーヴェン斷想」
- ・『楽星』第2巻第7号 P.74-76 編輯局解説「ヴァイオリン曲解説(1) Beethoven; Sonata Nr.9(Kraezersonata)」

- ・『楽星』第2巻第10号 P.27-32 楽譜「Leonore」  
主旋律のみの楽譜
- ・『楽星』第2巻第11号 P.49 「ベートーフェン號豫告」
- ・『楽星』第3巻第1号(ベートーフェン號)  
「ベートーフェン逝って滿百年」P.1  
桂近乎「ベートーフェン略伝」P.15-20  
野村光一「ベートーフェンの交響楽」P.21-4  
牛山充「ベートーフェンの提琴競奏曲」P.25-6  
「クロイツェル ソナータ ベートーフェン作曲」 P.27-37(楽譜)  
最終ページに解説あり  
河上徹太郎「『戯曲家ベートーフェン(或る散文詩の感想)』」P.39-42  
廣瀬將「ベートーフェンのピアノコンチエルト」P.43-6  
深谷甫「巨匠後期の絃楽四重奏に就いて」P.47-9  
桂近乎「表現音楽家としてのベートーフェン」P.50-62
- ・『楽星』第3巻第3号 P.15-9 野村光一「ベートーフェンの交響楽」
- ・『楽星』第3巻第8号 P.38-47 奥榴二「ベートーフェン作八短調交響曲の解剖」
- ・『楽星』第3巻第8号 P.11 「音楽大家の練習振り ルトイツヒ・ファン・ベートーフェン」
- ・『楽星』第3巻第8号 P.22-7 吉本踏吉「因縁嘯第九シンホニー」
- ・『楽星』第3巻第10号 P.3-12 桂近乎「マーラーの交響曲(付、オーストリア派概観)」  
実質的にはベートーヴェンとそれ以降の作曲家という論点でかかれているため、本リストに収録した。
- ・『楽星』第3巻第10号 P.21-33 楽譜「SYMPHONIE No.6 L.van Beethoven,Op.68」  
最終ページに解説あり
- ・『近代音楽』第2巻第1号 P.52-54 牛山充「荒削の荘厳さ」  
ベートーヴェン作品演奏家(特に「アパツシヨナータ弾き」として名を成した久野久とベートーヴェン作品についての記事
- ・『音楽と蓄音機』第13巻第8号 P.37-46 石川義一校閲楽乃家歌子演「大楽聖米東勉その六」
- ・『芸術と教育』第6巻第1号 P.18-22 リヒアルト・ワグネル/金生喜造譯「ベトーホーエフン参拝記(完)」
- ・『ラ・ミュージカ』第1号 P.11-12 「ベートーヴェンの手紙」
- ・『ラ・ミュージカ』第1号 P.12 「ベトオフェンレコード」

・『ラ・ミュージカ』第2号 P.12 矢内博譯「ベートーベンよりゲーテに送れる手紙」

(注記)

『新音楽』は、大正7(1918)年5月新音楽社より創刊された月刊雑誌で、第2巻第2号まで続く。

『新音楽』については、全号の調査を行った。

『音楽倶楽部』は、大正12(1923)年3月東京演芸通信社より創刊された月刊雑誌で、終了は不明。

『音楽倶楽部』については所在未確認分が多数存在するため、今回は第1巻第3,7号について、調査を行った。

『音楽グラフ』は、大正12(1923)年5月培風館より創刊された月刊雑誌で、第5巻第9号まで続く。

『音楽グラフ』については所在未確認分が多数存在するため、今回は第2巻第1号、第3巻第1-9,11号、第4巻全号、第5巻1-9号について、調査を行った。

『音楽評論』は、大正14(1925)年9月白眉出版社より創刊された月刊雑誌で、第2巻第8号まで続く。

『音楽評論』については所在未確認分が多数存在するため、今回は第1巻全号、第2巻第2-8号、第3-4巻全号について、調査を行った。

『楽星』は、大正14(1925)年7月楽星社より創刊された月刊雑誌で、第4巻第3号まで続く。

『楽星』については、全号の調査を行った。

『音楽と蓄音機』は、大正4(1915)年蓄音機世界社より創刊された月刊雑誌で、第14巻第9号まで続く。

『音楽と蓄音機』については所在未確認分が多数存在するため、今回は第13巻第8号のみ調査を行った。